

リレー随筆

三十一音、ひらける視界

岡本真帆

胸の奥にある曖昧な気持ちを三十一音の器におさめてみる。何が引っかかっているのか自分でもわからないまま、言葉を選んでいくうちに、ふいに視界がひらける瞬間があります。ああ、これだったんだ。気づけば、韻律の心地よさを確かめながら、作歌に没頭しています。

短歌づくりはルービックキューブに少し似ています。初め

はすべての面をどう揃えるのかわかりません。言葉を入れ替え、削り、視点を变えて試すうちに、あるときふとこれだと思える形になる。その手応えがうれしくて続けているうちに、気づけば私は歌人になっていました。

いい短歌って何ですか、と聞かれたら、私は「記憶に残る歌」と答えています。暮らしの中でふとよみがえり、自分の中から取り出せる歌。暗記ではなく、心に触れたから深く届く。そういう歌は時を超えて人々の中に残ると思います。

「ほんとうにあたしでいいの？ ずぼらだし、傘もこんなにたくさんあるし」

「平日の明るいうちからビール飲む ごらんよビールこれが夏だよ」

SNSをきっかけに多くの方に届いた二首です。人の記憶に残る歌を作りたいという願いは、少

しだけ形になったのかもしれない。けれど私は、言葉と想いがぴったりと重なる瞬間の小さな喜びが忘れられず、今日も歌を作っています。

昨冬、黒潮町で「海」をテーマに歌会を開き、全国から集まった多様な海の歌に出会いました。港の



匂い、旅先の眩しさ、記憶の中の遠い景色。世代や土地の違いを超えて、それぞれの「海」を三十一音で共有できたことは、今も忘れがたいです。短い言葉の奥に、それぞれの作者の心の一部が託されているようでした。

今回の展覧会は、こうした短詩型文学の力を見つめ直す機会です。『土佐日記』に始まる高知の歌の歴史から現在まで、短い詩は人々の記憶に残り続けてきました。そしてその短さは、暮らしの中でよみがえり、私たちに言葉を立ち上がらせてくれます。読むことも作ることも、それぞれに楽しさがあります。まずは気になった歌や句を声に出してみてください。心に残る特別な一首や一句が、きっとどこかであなたを待っているはずです。

(歌人・作家)

次回
開催

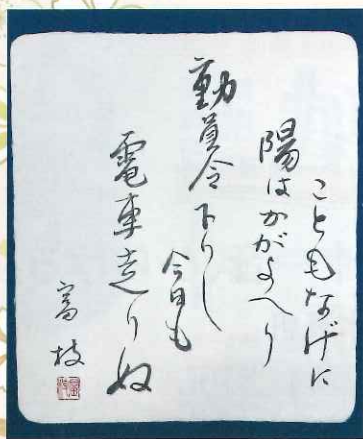
「短詩型文学 その魅力」

令和7年10月4日(土) 令和8年1月4日(日)

今秋、高知県立文学館では、短歌や俳句の魅力を紹介する企画展「短詩型文学 その魅力」を開催します。

小説などのように長い作品だと、作品のすべてを展示で紹介することは困難です。しかし今回は、短歌や俳句という短い詩形のものばかりなので、各作家たちのカラフルな個性あふれる作品の魅力をできるだけたくさん、皆さんに紹介できたらと思っています。

展示では、高知県のジオラマに



大原富枝色紙

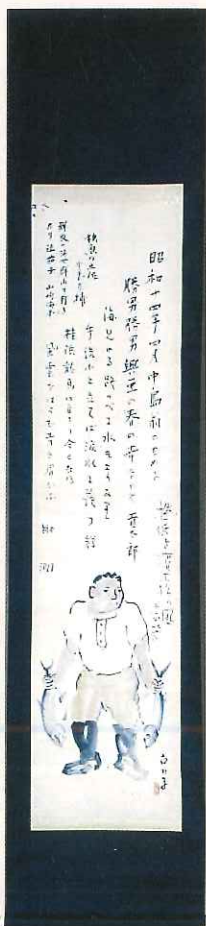


「木兔」2巻9号(若尾瀾水「子規子の死」掲載)

落とし込んで紹介する「高知を詠んだ作品」&「県内の歌碑・句碑マップ」、作品そのものの魅力を紹介するコーナーとして、県内高校の文芸部や俳句同好会が選をしてくれた作家たちの歌や句に、障がい者支援施設の皆さんが土佐和紙を貼り付けたものを天井から吊るす「ことのは」に加え、当館が所蔵する短歌や俳句にまつわる資料もあますところなく展示します。

大町桂月がその家族と作った短歌を書き込んだ手書きの手帳、高知を巡った博浪沙の面々が書いた寄せ書きの軸など、彼らが楽しんで作品を作っていた様子が伝わるもののほか、貴重な資料をご紹介します。県内の俳句・短歌サークル紹介コーナーもありますので、気になるサークルのある方はぜひ参加して、作品を作ってみてください。

イベントも盛りだくさんです。四万十市出身で、大人気の歌人・岡本真帆さんの記念講演会をはじめ、俳句甲子園の選者でもある神野紗希さんの講演会&句作指導、短歌や俳句の吟行、お気に入りの句や歌入りキーホルダー制作、俳画チャレンジ、句や歌にまつわる作



中島翁への博浪沙寄せ書き書軸(昭和14年4月)

品を紹介する朗読の会などを予定。さまざまな形で短歌や俳句の魅力をご紹介します。展示会は10月4日(土)からのスタートとなります。どうぞお楽しみに！

(学芸課/川島禎子)



大町桂月「北條咏草」(大正5年夏～)

企画展

原作出版 80 周年



© 2025 Gullane (Thomas) Limited.

きかんしゃ トーマスの 世界展

はたらく機関車たちのおはなし



令和7年 7月5日(土) 9月15日(月祝)



つないだ線路の上をトーマスたちが走り出す。

デジタルアー
ティストの Pook
さん制作のもの
で、線路のパ
ーツを2つつなげ
ると音楽が流れ
てアニメーショ
ンが投影され、
トーマスや仲間
たちが動き出し
ます。子どもた
ちはくっつけた
り、離したり、長

高知県立文学館では、毎年夏には親子で楽しめる展覧会を開催しています。今年は「きかんしゃトーマスの世界展」を開催。日本では1973年にポプラ社から「汽車のえほんシリーズ」が出版されて以降、1990年にはテレビアニメ「きかんしゃトーマス」の放映がスタートし、実写版から3DCG、2DCGへと時代に合わせ進化しながら日本の子どもたちに長年愛されてきましたが、原作が出版されてから今年で80周年を迎えました。

展覧会では原作絵本『3だいの機関車』と『機関車トーマス』の原画を38点展示しているほか、モデルアニメシリーズで実際に使用された模型など貴重な資料を多数展示しており、トーマスファンはもちろん、SLファンの方々も熱心に資料をご覧になられています。

そんな中、「キューピ、キューピ」とかわいいサンダルの音をさせながらトーマス展にやってくる小さなお子さんたちが一番笑顔になるのは、展示室奥のデジタルアートのコーナー。



原画とともにアニメーションが流れる。

長い線路を作ってみたりと、時間の許す限り楽しく過ごしてくれています。

また、物語のシーンがちりばめられたソドー島のジオラマを、じっくりと見てくれるお子さんもたくさんいて、原画で展示している「なきけい」の「絵本と一緒だ！」と教えてくれたり、道路を走る自動車にも目を留めて、「この車はなんていうの？」と興味津々に聞いてくれます。

「きかんしゃトーマスの世界展」は9月15日(月・祝)まで開催中です。

小さなお子さんから大人の方まで思い思いにトーマスの世界を存分にお楽しみください。

(学芸課/岡本美和)

花咲くモダンデザイン 大正イマジユリイの世界へ 閉幕！

最終日には寺田寅彦の蓄音機を実演！！

大正時代の出版文化の魅力を伝える
展覧会「花咲くモダンデザイン」大正
イマジユリイの世界」が6月15日
(日)に閉幕。

最後まで当時の雰囲気を楽しんでい
ただきたいと、最終日には大正時代に
活躍した物理学者・寺田寅彦が愛用し
た蓄音機と、同じく寅彦愛蔵のレコー
ド「アヴェ・マリア」「交響曲第6番 短
調 悲愴 第1楽章」を実演するフ
ァイナルイベントを開催しました。



蓄音機実演の様子



蓄音機実演の様子

実演した蓄音

機は、大正10(19
21)年に寅彦が
二代目として購
入したアメリカ
ビクター製の「ビクトロラIX(9)号」

で、すでに100年以上の時間が経って
います。貴重な資料であり、なるべく当時
のままの姿を後世に遺したいため、実演
することは大変珍しく、職員も細心の注
意を払い蓄音機を動かしました。レコー
ドに針を落として生じる「ジジジ」と
いうスクラッチ・ノイズすら味わい深
く、SPレコードならではの重厚で豊潤
な響きに通りがかったお客様も足を止
めて聴き入ってくださり、寅彦担当学芸
員の分かりやすい解説とともに、多くの
お客様から絶賛の声をいただくことが
出来ました。

本展は巡回展ではありませんでしたが、独
自コーナーとして高知で「大正」の地名
を冠するエリアを紹介。中土佐町や大
正浪漫実行委員会(四万十町)の皆さん
にご協力いただき、地名の由来や、大正
時代の華やかな着物や帯の展示をした
ことも「高知らしくて良かった」と好評
いただけました。

大正時代に花開いた印刷文化や抒情
性、モダン感覚あふれるデザインやイ
ラストレーションの数々は現代でも愛
され、私たちの身近な暮らしに寄り添
い続けています。展示を通してそのこ
と教えてくれた山田俊幸先生はじめ株
式会社キュレイターズの皆様、展示に
ご協力くださった関係者の皆様、そし
て来館者の皆様に心より御礼申し上げ
ます。

(学芸課／福富陽子)



展示の様子

新資料紹介

田村三治宛 幸徳秋水書簡

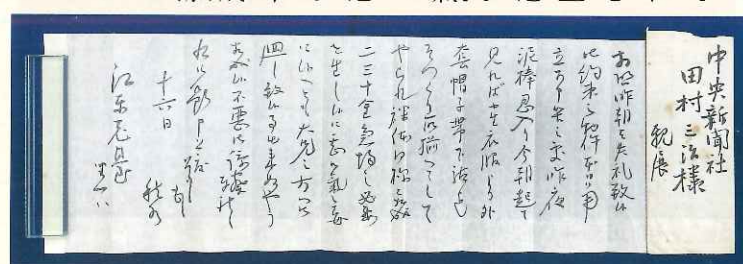
【明治32(1899)年11月16日】

このたび当館では、幸徳秋水の
書簡を購入しました。巻紙に毛筆
で記された封書で、切手はありま
せん。郵送でなく、持参した手紙
と考えられます。

書簡の相手は田村三治号は江東
新聞記者です。田村は明治27年に中
央新聞社に入社、その翌年に秋水
が同社に入社しています。秋水の
日記「時至録」を見ると、何度か
田村と飲んでいましたので、仲もそ
れなりだったのではないかと思
います。

秋水は明治31年、高知県出身の
黒岩涙香が設立した新聞社「萬朝
報」に移ります。書簡は萬朝報時
代の秋水のもので、こう書かれて
います。「拝啓昨朝は失礼致候
御約束之物件本日御用立可申筈
之處昨夜泥棒忍入り今朝起て見
れば小生衣服より外套帽子帯下

袴迄そつくり取揃へて
してやられ
裸体同様と
相成 二三
十金急場之
必要を生し
候に甚御氣
之毒に候へ
とも大兄之
方へ御廻し
致候事出来
ぬやう相成
候不悪御諒
察奉願候」。



泥棒に入ら
れたので、
約束のもの
を用立てることができなくなっ
た、という内容です。

日記「時至録」を見ると、明治32年
11月16日の項で泥棒被害のことを
詳しく記しています。下着から普
段着、帯、帽子に外套、下駄まで盗
られてしまったようで、代わりに
泥棒が脱ぎ捨てたと思しき着物
が隣家に捨ててあったとか。この
年の7月に秋水と結婚した千代
子夫人も、さぞ驚いたのではない
でしょうか。

(学芸課／川島禎子)

『土佐日記』船出の地

「土佐文学さんぽ」では、前号より『土佐日記』ゆかりの碑を紹介しています。今回は日記中に「船に乗るべきところ」として登場する大津（現在の高知市大津、旧長岡郡大津村とされる）にある碑をご紹介します。土佐日記で「大津より浦戸を指して漕ぎ出づ」と、初めてはつきりとした地名がでてくるのがこの大津です。

土佐出身の国学者・歌人の鹿持雅澄（1791～1858）の著書『土佐日記地理弁』には当時の地形を推測した「古代之図」が付されており、この図によると古代は現在の高知市の中心まで海が広がり、大津は国府が置かれてから重要な港であったようです。

船出の地となった大津の港の具体的な場所は、鹿持雅澄の「舟戸説」が有名です。



「紀貫之舟出の地」碑



『土佐日記地理弁』（部分）

現在、大津小学校の校門付近には「紀貫之舟出の地」と刻まれた碑があります。小学校の近くには「舟戸橋」や「舟戸説」の場所になっているといえるでしょう。

また、日記には「鹿児の崎」という地名も見られ、崎とあるように当時は海に面した岬だったようです。貫之一行が船出後、この地まで人々が酒をもち追いかけてきて、歌を詠み合います。見送りの人々が合作したのは別れを惜しむ歌で、貫之はその深い思いに感謝する内容で返歌をしました。歌を詠む際、送る人々は漁師が網をかつぎ出すように足を踏みならし調子を合わせて「踏歌」のような動作をしたとあり、やりとりをした2首の技巧性も相まって印象的な場面となっています。鹿児の崎は、路面電車通りと国道195号線沿いにある現在の鹿児山に比定され、鹿児神社が静かに佇んでいます。

そんな送別の宴の中、梶取にせかれて船に乗り、貫之たちは浦戸を目指します。

（学芸課／笠岡花菜子）

資料受贈報告

寄贈資料から

『歌集 いごつそと村医者』

小谷了一著 角川文化振興財団刊

2025年5月 四六版 181頁

小谷了一氏 寄贈



小谷了一さんは、昭和19（1944）年生まれ、高知県四万十市出身の元医師です。高齢者医療や地域医療を支えながら命に向き合ってきました。医療に携わる一方で随筆も手掛けており、平成25（2013）年に認知症患者とその家族を描いた『もういいかい』『もういいよ』、平成30（2018）年に先生が診察だけでなく患者さんの暮らしや家族にも思いを巡らせ、時に厳しく叱り、時に優しく話を聞いているのを側で見守る、机の視点で綴った『吾輩は診察室の机である』を発表しています。

今回ご寄贈いただいた『歌集 いごつそと村医者』は、宮中歌会始にも選ばれた歌人で、高知の方言で頑固者を指す「いごつそと」な自身の父の背中を追って詠まれた歌集です。平成23（2011）年、父の三回忌を機にその生きざまを描いた『一枚の絵葉書』には5冊の父の歌集の中から心に残った歌が引用されています。ライブ関係で正面から向き合えず、長い間手に取れなかった歌集を初めて目にし、丹念に読み込んだことをきっかけに小谷さんの作歌が始まります。「あの世から父

の「それみろ、お前には無理だ」という声がいまだに聞こえてきて、いつかは父の背を追いつくことだけを願いつつ短歌を続けている始末なのです」と小谷さんはあとがきで言っています。「いごつそと村医者」の短歌は、どれも難しい言葉はありません。子どもが注射と対峙する微笑ましい光景や、年を重ね医師を続けることの葛藤、家族の茶目つあふれる日常や感謝の気持ちが込められた歌がユーモアに優しく編まれています。歌集装幀は、無骨な高知城石段を捉えたカバーを外すと、青空に白色の大きな入道雲のコントラストが美しい表紙が現れます。どちらも小谷さん本人が撮影された写真で、歌人としても新たな一歩を踏み出した小谷さんの心情が伺えます。短歌って難しい？そんな風に思っている人にこそ、ぜひお手にとって頂きたい1冊です。

（学芸課／山崎真理）

受贈報告

（令和7年5月～7月）敬称略

- ▲柴田ケイコ「パンダのおさじとせけん」バ
ンダ 柴田ケイコ作 ポプラ社刊「他
中脇初枝「こどももの」833号「かぐ
やひめ」竹取物語より 再話：中脇初枝
絵：中井智子 福音館書店刊」
▲Cakemon「ハムスターでい」とかいとう
ニャー 作：大塚健太 絵：柴田ケイコ
Gakemon刊」
- ▲高知新聞社「やなせたかしはじまりの物
語最愛の妻 暢さんとの歩み 高知新聞
社編刊」
- ▲網理舎「窮理27号 伊崎修通編 窮理舎刊」
- ▲『新青年』研究会・『新青年』趣味25号
『新青年』趣味編集委員会編刊」
- ▲高知ベンクラブ「高知文芸年鑑2025
年版 高知文芸年鑑編集委員会編 高知
ベンクラブ刊」
- ▲高知県立大学文化学部・高知県立大学文
化論叢13号「高知県立大学文化論叢」編
集委員会編 高知県立大学文化学部刊」
- ▲森下一仁「エルギスキへの旅 森下一仁著
ブターク書房刊」
- ▲中野悦子「健人のたからもの
中野悦子著 飛鳥出版室刊」
- ▲風「とさちようものがたり編集部編 土佐町
役場刊」他

このほか、全国の個人・関係機関の皆様から
図録など数多くの資料をご寄贈いただきま
した。厚く御礼申し上げます。

北見志保子生誕140年

「この人をこそわれは恋ふらめ」

宿毛出身の歌人・北見志保子には、永く愛唱されている歌があります。

人戀ふはかなしきものと平城山にもとほりきつつ堪へがたかりき

古へも妻にこひつつ越えしとふ平城山のみに涙おとしぬ

昭和10年に伊野町出身の作曲家・平井康三郎の作曲で「平城山」という歌曲として発表され、以来、長く親しまれ、愛唱されてきました。

この歌は、志保子が「磐之媛皇后御陵」として発表した8首のうちの2首を、平井康三郎が選んで曲をつけたもので、志保子自身は、後年歌集『花のかげ』にこの2首を取めたときも「磐之媛皇后御陵」の題をつけていることから「磐之媛」への深い思いがうかがえます。

磐之媛皇后とは仁徳天皇の皇后で、大変嫉妬深い女性として『日本書紀』や『古事記』に登場します。『古事記』には「足も足掻かに（足をあがくように）バタバタさせて」「嫉妬したと書かれてい

ます。そんな皇后に、仁徳天皇が八田皇女を妃にしたいと相談しますが、磐之媛皇后はもちろん許しません。しかし、皇后が熊野に出かけている間に天皇は八田皇女を召し入れてしましました。これを知った磐之媛皇后は怒り、仁徳天皇のいる難波宮へは帰らず、筒木宮に籠ります。そして、何



忠次郎と志保子（大正末頃）

度も足を運ぶ使

者や、自ら足を運んだ天皇にも会わず、5年後に崩御したのでした。

志保子は、

夫・橋田東声の門人で12歳年下の浜忠次郎との許されざる恋のため、大正11年、夫とも忠次郎とも別れ、一人奈良に滞在。その折、ひとり、磐之媛皇后が眠る御陵を訪れ、古の万葉の女性に想いを寄せ、自らの詩藻を養いました。これらの日々が、のちに名歌を生む母胎となっていたのでした。

志保子と忠次郎の恋は成就し、大正14年、忠次郎がフランス留学から帰ると二人は結婚。

「磐之媛皇后御陵」の8首は、昭和9年4月に志保子が主宰する短歌雑誌「草の実」に発表されたものです。

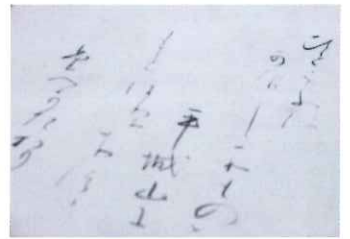
「人戀ふは…」の歌は、奈良滞在中にフランスの忠次郎を想いつつ、磐之媛皇后御陵を逍遙した時の思いを重ねて、天皇を想う磐之媛の心を歌い、「古へも…」の歌は妻である磐之媛を想って平城山を越えて行かれた天皇の心をもって作ったものでした。

悲しくも気高い万葉の女性の思いに心を寄せつつ、遠く離れた人を想う心を歌ったこの歌は今も、多くの人の心に深く刻まれ、愛唱されています。

企画コーナーでは志保子の自筆色紙を展示していますので、この機会にぜひご覧ください。

「平城山」の歌人・北見志保子の展示は、令和8年3月22日（日）まで。ぜひ文学館にお越しください。

（学芸課／岡本美和）



志保子自筆色紙「ひとこふは…」

夏休み
出張おはなし
キャラバンに
行きました



今年の夏休みも文学館カルチャーサポーターのみなさんと県内の小学校放課後児童クラブや放課後等デイサービスを訪れ、紙芝居や絵本の読み聞かせを行いました。連日厳しい暑さでしたが、行く先々で児童のみなさんに元気なあいさつで迎えてもらえると、私たちもやる気がでます。紙芝居は豊かな土佐弁で語られます。テレビやインターネットの普及により方言を話す子どもが少なくなっていると耳にしたことがありますが、紙芝居にでてきた土佐弁の意味を問うと、はつきりと答えてくれたので何だか安心した気持ちに。また、紙芝居の内容も昔の民話のため聞きなれない言葉もありますが、子どもたちは想像力をはたらかせて聞いてくれている様子でした。



（学芸課／笠岡花菜子）

でもたちの興味津々な様子が伝わっていると、「この絵本にしてよかった」と感じます。絵本は卒業したかな？という中高学年のみなさんも集中して聞いてくれたのが印象的でした。

この出張おはなしキャラバン活動を支えてくださったっているカルチャーサポーターのみなさんは、読み方や間の取り方をメモされるなど深く作品を読み込まれており、その熱心な姿勢に私たち文学館スタッフも感化されました。多くの方が夏休み期間中に2回、3回と同伴してくださることで大いに助けられています。今後ともお力添えいただけますと幸いです。

最後になりましたが、出張おはなしキャラバンにお申込みいただいた先生方、元気に参加してくれた児童のみなさん、ありがとうございました。また来年もお会いできれば嬉しいです。



風にほんの少し秋の
気配が混じり始めたこ
の頃、夏の企画展「原作
出版80周年きかんしゃ
トーマスの世界展」は
たらく機関車たちのおは
なし」は9月15日(月・
祝)まで開催しています。

館内では、原
画やソドー島
のジオラマを
見ながらキャ
ラクターの名
前を話し合う
子供達や、スタ
ンプラリーと
たからさがし
に夢中になっ
てチャレンジ
する姿があふ
れています。



ミュージアムショップでは、トーマスシ
リーズ「新・汽車のえほん」①巻から最新
刊②巻をはじめ、図鑑などいろいろな書
籍を販売しています。

プラレールやトミカ、オリジナル商品
のキーホルダーやマグネット、トーマス
キャラクターのポストカード、アイシン
グビスケット・ポーロなどのお菓子も取
り揃えています。

ご観覧の際は、是非ショップにもお立
ち寄り下さい。

(総務事業課/海治紫野)

館長エッセイ

短い言葉を深く読む秋に

澤田 博睦

毎日楽しみにしているNHK朝の連続テレビ
小説「あなばん」も、放送期間の終盤に入り、
いよいよ大詰めを迎えつつあります。馴染みや
すい土佐弁もさることながら、やなせたかしさ
んが幼少期に過ごした土地やテレビアニメのキャ
ラクターにちなんだ地名や登場人物など、
ちよつとした工夫があつて親近感を抱きつつ見
入ってしまいました。

まだまだ残暑厳しい折、ゆく夏を惜しむよう
に「あなばん」ロスを思い、しつかり目に焼き
付けているところです。

主人公のモデルとなつたやなせたかしさん
は、言わずと知れた絵本『あなばんまん』(フ
レーベル館)の作者であり、また、詩人でもあ
りますので、当館では1階無料スペース「こど
ものぶんがく室」に高知の児童文学作家のお一
人として紹介パネルを設置して、著書とともに
ご覧いただけるようにしています。

また、2階有料フロアの常設展では、近現代
の詩歌のジャンルで、詩人としては勿論、漫画
家、グラフィックデザイナー、編集長、作詞
家、作曲家など多くの分野で活躍されたやなせ
たかしさんの足跡を紹介しています。

いろんな経験を積み、様々なジャンルで活躍
したやなせさん。「人生にムダなことなんて一
つもありません」という言葉に、遠回りと思っ
ても前に進む勇気がもらえます。「あなばん」
の放送期間が過ぎても、高知県立文学館では
「やなせたかし」さんの紹介コーナーや絵本な

どを引き続きお楽しみいただけます。

詩歌といえは、これまでなんとなく気ぜわし
く時間に追われる毎日に、短く洗練された言葉
をじっくりと味わい、その意味を深掘りするこ
とはついつい敬遠しがちで、縁遠いものに感じ
ていました。すっかり、文章のキーワードをナ
メに読む癖がついてしまっていますが、還暦
を過ぎて来し方を振り返ることが多くなつてく
ると、ふと「詩」の力というものを考えるよう
になりました。

有名な詩人が旅立ったこともきつかけの一つ
ではありますが、今まで興味を持てなかった詩
歌が、読む人の想像力で世界が大きく広がるこ
とや、逆に等身大の自分自身を見つめるいい機
会になるのだということを思うようになりまし
たし、じっくりと深読みしてみようという気持
ちが湧くようになったところです。

今年の文学マイスター講座のテーマは、「詩
歌を学ぶ」。

そして10月4日(土)からは、企画展「短詩型
文学 その魅力」が始まります。近年人気が高
まっている俳句や短歌の世界がより身近に感じ
られ、深く味わえば新たな自分に出会えるか
も。徐々に深まる秋の夜長に期待が膨らみま
す。



「深」

新職員の 紹介

学生だった頃は深く知る余裕もなかった地元の歴史・文化や文学を、数年前に高知へUターンしてから
は、文学館をはじめとした施設を通じて楽しむようになりました。

そんな一利用者であったところ、ご縁あって今夏より文学館の一員となりました。

仕事の幅広さに若干慄いておりますが、職員や関係する方々へのサポート業務を通じ、来館いただく皆様に、快適で心に残る体験
をしていただけるよう努めます。

(総務事業課/石元優子)



- 展覧会の紹介をしています！詳しくは3ページ目をご覧ください。

展覧会の紹介をしています！詳しくは表紙・2ページ目をご覧ください。

